

東京・春・音楽祭 2020

東京春祭ディスカヴァリー・シリーズ vol.7



ジャコモ・プッチーニ

曲目解説

文・吉田光司

小さなワルツ

1894年作曲のピアノ小品。《ラ・ボエーム》の第2幕のムゼッタのアリア「私が街を歩くと」に再利用。

歌劇《妖精ヴィッリ》より「もし私がおまえたちのように小さな花であったなら」

1884年初演のプッチーニの最初のオペラ。アンナが出立する婚約者ロベルトへの思いを花に語りかける。

歌劇《ラ・ボエーム》より「冷たい手を」

プッチーニのまさに代表作。1896年初演。詩人ロドルフォがお針子のミミに自分を紹介する。

太陽と愛

1888年作曲の歌曲。《ラ・ボエーム》第3幕幕切れの二重唱に再利用。

ポンキエッリ：歌劇《ジョコンダ》より「空と海」

1876年初演。ポンキエッリはプッチーニのミラノ音楽院での師匠。船乗りエンツォ（実は追放された領主）がかつての恋人ラウラを思って歌う。

歌劇《蝶々夫人》より「ある晴れた日に」

長崎を舞台にしたオペラ。蝶々さんが夫ピンカートンの帰還の日を思い浮かべて歌う。

菊の花

1890年、44歳で亡くなったイタリア王家のアメデオ王子（一時スペイン王に就いた）を悼んで一夜で書き上げられた弦楽四重奏曲。《マノン・レスコー》で再利用。

歌劇《トスカ》より「星は光りぬ」

敬虔な歌姫トスカが警視総監を殺害する悲劇。1900年初演。トスカの恋人カヴァラドッシが処刑直前に彼女を思って歌う。

歌劇《トスカ》より「歌に生き、恋に生き」

警視総監スカルピアに邪な情愛を迫られたトスカが絶望して歌う。「芸術にも（宗教的）愛にも尽くしたのに、神よ、どうして」という内容。

マスカーニ：歌劇《カヴァレリア・ルスティカーナ》より 間奏曲

ヴェリズモ（現実主義）オペラの大旋風を巻き起こした作品。1890年初演。題名は「田舎の騎士道」の意。マスカーニはプッチーニの学友だった。

歌劇《ジャンニ・スキッキ》より「フィレンツェは花咲く木のように」

1918年初演の《三部作》の一つ。一族が遺産相続に窮していると、若いリヌッチョが、フィレンツェの偉人を引き合いに、ジャンニ・スキッキの助けを借りることを提案する。

歌劇《つばめ》より「ドレッタの美しい夢」

1917年初演。金持ちの愛人マグダの切ない純愛。「ドレッタの美しい夢」は、マグダが、ドレッタという娘が見た夢について歌うアリア。

歌劇《西部の娘》より「やがて来る自由の日」

西部劇オペラ。ディック・ジョンソンこと盗賊ラメレスが処刑直前に、愛するミニーには死を知らせないでくれと頼む歌。

歌劇《マノン・レスコー》より 間奏曲

1893年初演のプッチーニの出世作。間奏曲では罪人となったマノンと彼女を救いたいデグリュエの思いが回想を交えて描かれる。

歌劇《トゥーランドット》より「誰も寝てはならぬ」

プッチーニの最後のオペラ。「誰も寝てはならぬ」は、トゥーランドット姫に自分の名前を問うたカラフが、自らの勝利を確信して歌うアリア。トリノオリンピックでフィギュアスケートの荒川静香が金メダルを取った時の使用曲として有名。